

## 美學の基礎に就ての考察（完結）

深 田 康 算

### 十五

上來叙述し來つた所からして、リヒャルド・ハーマンが『美學及一般藝術學雜誌』一九一五年四月號に載せた『美學の基礎附けに就て』と云ふ論文に現はれて居る思想は、略明瞭になつたと思はれる。私は此論文に就て——其れが多くゝの點に於て、尙一層詳しい説明を望まざるを得ず、又二三の點に於ては吾々を首肯せしめぬに拘はらず——色々な意味から特に興味を感じた爲めに、概要と云ふにはあまり詳しく過ぎる程の紹介を敢えてしたのである。終りに臨んで、先づ其摘要を約説するのが便宜であると思ふ。

ハーマンの論文は、先きに述べた様に第一章『方法』と第二章『美學の原理、及び美的形像に就ての概念の現象學的構成の原理』との第二章から成立つて居る。そして第一章

『方法』の論に於て、ハイマンは、總ての經驗的諸科學が反應學 *reagierende Wissenschaften* なること、美的意味が其等の科學の概念に依つては規定せられ得ぬこと、従つて美學は、(實踐的)目的に關係なくして、直接に經驗せられる所のものを、其儘記述する純粹記述學 *Rein beschreibende Wissenschaft* 若くは現象學 *Phänomenologie* なることを明かにし(本論文一より五、本誌第十號四二—四八頁、第十二號一〇—一二三頁、第十三號八五—一〇一頁參照)。第二章に於て、此の如き現象學として美學の根本的諸概念を、(感覺)知覺)内容其自ら意味を有するものとしての『美的形像』の諸條件から導き出して居る(同上六より十四、本誌第十三號一〇—一〇五頁、第十四號六八—九六頁、第十五號九九—一一七頁、第十六號一〇二—一二三頁、第十九號一〇四—一二〇頁、第二十號九三—一一頁參照)。

美學が純粹記述學若しくは現象學であると云ふハイマンの考は、斷はる迄もなく、美學には何等の概念もなく又法則もないと云ふのではない。又美學が純粹記述學若しくは現象學でなければならぬと云ふのも、決して經驗的科學としての美學の諸部門の可能を否定するの意ではない。經驗的科學としての美學が心理學的に、自然科學的に、若しくは又社會學的に取扱はるべきことを、ハイマンが否定して居らぬと

云ふことは現象學的美學を以て、其れ等の諸部門の基礎學であると見做して居る事からして明らかである(同上四、特に本誌第十三號九八頁以下參照)。美學が純粹記述學たり現象學たらねばならぬ所以は、美的意味若しくは美と云ふ性質が總ての經驗的科學若しくは反應學の概念に依つては規定せられぬのに基く。若し一方に於て、總ての經驗的諸科學が先驗的概念に基いての直接經驗の改造と組織とであり、而して他方に於て、是等の諸科學の根本概念に依りては美の意味が規定せられ得ぬとするならば、美的意味の規定を其の究竟問題とする美學は、當然經驗的反應的科學ではなくして、純粹記述學若しくは現象學でなければならぬ。美學が純粹記述學であり現象學であると云ふことは、其れ故に美的意味が直接經驗に與へらるゝ直接所與に依つて規定せられるものなること、先驗的概念に依る所の其れの改造と組織との體系の中に組み入れられぬものなること、従つて直接所與そのものゝ純粹記述に依りて規定せられなければならぬことを意味するのに外らない。而して直接所與そのものとは、感覺知覺内容である。其れ自らは諸種の意味領域に組み入れらるゝ可能を有する併し其れ等の孰れが一つの領域に組み入れらるべき必然を其自らには有せぬ所の感覺内容が、先驗的概念に基いて改造せられ組織せらるゝことに依つて、總

ての經驗的科學的認識の對象は構成せられる。此構成の原理は、一方に於て、認識と經驗とが可能なるための前提としての實踐的目的であると云ふ點に於て、經驗的科學の反應學なることを示し、他方に於て、それは直接所與を其自ら以外の意味の下に解釋する見地に立つと云ふ點に於て、經驗的科學が依他的意味領域の體系なることを示して居る。其れ故に、美が實踐的目的の如何なる概念に依つても規定せられず従つて感覺内容其自らの意味以外の他の如何なる意味をも有して居らぬことは、美の規定、美的意味の規定が感覺内容其自らの有する意味に依つてのみ可能であるとの證明となる。而して感覺内容其自らの有する意味を規定することは、之れを或他の見地の下に解釋することでは有り得ずして、單に之れを其あるが儘の姿に於て見ること、之れを記述することではなければならぬ。感覺内容其自らの意味の規定は、先驗的概念に基く直接所與の改造と組織とに依るのではなく、又感覺内容の依他的意味に基く解釋に依るのではなくして、直接所與そのものゝ記述、感覺内容其自らの意味の理解に依る。斯くして美學は、直接所與であり、其自ら意味を有する感覺内容である所の美的形像に就ての現象學を其基礎としなければならぬ。現象學とは先驗的概念及び依他的意味に基く所の解釋に對して、單に直接に與へられたるものに就て

の純粹の記述を指して云ふのである。約言すれば、經驗的對象が先驗的概念依他的意味に基いての直接所與の改造であることは、總ての經驗的科學をして實踐的反應的科學たらしめる。美的形像が直接所與そのもの、意味に依つてのみ意味を有すると云ふとは、美學をして現象學的純粹記述學たらしめるのである。——現象學的と云ひ純粹記述學的と云ことが、如上の意味であることを知れば、美學に於ける形像の記述と、經驗的科學に於ける對象の記述との間に大なる差異の有することも亦明らかであらう。美的形像の記述は、直接所與の純粹なる記述なるが故に、純粹なるに拘はらず記述なるが故に、若しくは記述さるゝ所のものが純粹直接所與なるが故に、其記述は記述せらるゝ所のものを指示するに止まり、之れを意味し得ない。直接經驗に與へらるゝ直接所與の意味は、唯之れを自ら經驗することに依つてのみ知らるべくして、如何なる記述も符號も、如何なる概念も法則も之れに代はり得ないからである。現象學であり、純粹記述學であることは、其れ故に、美學をして經驗的科學と全く性質を異にする學たらしめるに止まらず、其れ等と對立する、其等と同列なる學たることをも得せしめない。美的形像の記述に於ては、經驗的對象の記述に於ての如くに、記述せらるゝものと其記述との間に一致の存すことが許されない。従つて對

象に就ての科學があり得ると云ふ意味に於ては、形像に就ての美學なるものは有り得ぬ。經驗的對象は經驗的諸科學の概念に依つて始めて構成せられるのである故に、概念に依る記述は即ち同時に其對象を指示すると共に之れを意味する。概念なくしては對象が有り得ぬのである。之に反して、美的形像は全く何等の概念に基いて構成せられたものでない。直接所與そのものであり感覺内容其自らの意味であるが故に、概念に依る記述たるに止まる〔純粹〕記述は、此美的形像を指示すると共に意味することは出来ないのである。此の如くなれば、美學が純粹記述學であると云ふ時其記述は——美學が學である以上——美的形像に就ての記述ではあり得ぬと云はなければならぬ。現象學としての美學の任務たる記述は、美的形像の記述若しくは美的形像そのもの、記述ではなくして、寧ろ美的形像が如何にして可能なるかの記述である。經驗的科學が對象の記述である如き意味に於ての記述ではなくして、認識論が對象の可能的條件の記述である如き意味に於ての記述である。そして認識論が對象の認識に役立つはず、唯其可能的根據を闡明する如くに、美學は美的形像の認識には役立つものではなくして、唯其可能的根據を明らかにし得るに止まる。斯くして學としての美學は認識論の一部としてのみ可能であり、而して其記述は現象

74) 學的にのみ可能なのである。――

ハイマンの此議論に對しては、私は何等の反對し得べき理由を見出し得ない。美學の經驗的諸部門の可能も亦此の如き現象學的美學を其基礎として始めて確定せられる。而してハイマンの意味する現象學と認識論とに依りて、美的意味の基礎附けが始めて成し遂げ得らるべきことは美的形像が直接所與であり、其自ら意味を有する感覺内容であることから疑ふとは出來ぬと考へられる。カントが美を無關心的に概念に基かずして、普遍的に満足を與ふるものと定義し、又美に就ては客觀的原理を立てることが出來ぬと述べたのもハイマンの論ずる所と異なる見地からでは無い。若し吾々にハイマンの論述に對して、尙多少の論ずべきものが残つて居るとするならば、それは反應學と純粹記述學とに就ての概念的規定が、尙一層詳密なる説明を――此問題の重要さに比例して――必要としたのであつたと云ふ點及びハイマンの心理學的美學に關する見解が(上の點と自ら關係して、心理學をあまりに狭く取るの結果不當なる批難を主要なる心理學的美學に向つて下さしめるに至つたと云ふ點であらう。此二つの點に就ては私は已に本論文の初の方に於て述べたのである(本論文二、本誌第十二號一〇六一―一一七頁參照)。今私は是等の點で尙詳しい考

察に進む暇を有して居らぬ。此では尙一の他の點——而してそは極めて重要なる點——に關して少しく注意する丈けに止めようと思ふ。

ハーマンが彼の論文に於て試みた所は、美的形像の可能なる條件に就ての現象學的記述である。而して彼の論文の第二章に披瀝せられた『美的形像に就ての概念の現象的構成の原理』は、此種の試みの最初のものゝ一として極めて興味ある者である。併しハーマンの企てた所及び成し遂げた所のものに就て吾々は十分明瞭に其範圍と限界とを見定めて置かなければならぬ。私を見る所に依れば、ハーマンの企てたそして成し遂げた所のものは、彼の自ら明らかに述べて居る所の如くに、美的形像の構成の諸條件の現象學的記述である。此種の記述に依つて、美學は始めて其基礎概念を確立する事が出来、而して經驗的美學の諸部門の研究に於て、概念上の混亂の生ずることを防ぐ事が出来るに相違ない。其の意味に以て、此の如き現象學的記述を以て美學の基礎と見做すことは、云ふ迄もなく正當である。然しながら、ハーマンの試みた所の現象學的記述は——現象學の問題が、『如何なる原理に従つて、直接所與が現實的經驗に變形せらるゝか。直接所與の中に、如何なる必然的關係が存在するに依つて、此變形が生ずるのであるか』に在るのであるからして、——美的形像の構成の原

理を明らかにすることは出来ても、何故に美的形像が吾々に取つて深い意味を有するのであるかは明らかにせられぬ。彼の現象學的記述に依りて、吾々は對象と形像との區別を、依他的意味と其自らの意味との區別を、而して美的價値が感覺内容其自らの意味に基くものなることを知り得たのである。然しながら、總ての依他的意味の拂除と、感覺内容其れ自らの意味の集中とに依つて構成せらるゝ美的形像は、何の故に或一つの意味を有するのであるかは、此記述に依つては明らかにせられぬ。私の云はうとするのは、ハイマンの所謂現象學的記述を批難しようと云ふのではない。又彼自らが明らかに課題として己れに課した問題以外に屬すべきものを、彼から要求しようと云ふのではない。唯此の如き現象學的記述の外に、若しくは其一步先きに、尙一つの重要な問題が横はつて居ることを注意したのである。而して其問題とは、直接所與若しくは感覺内容其自らの意味が何の故に一つの意味となるのであるかと云ふに在る。此問題がハイマンの現象學的記述學の課題には屬せざるもの、少くとも彼の與へた美的形像の構成の原理からは説き明かれ得ぬものなることは明らかであらう。そして其れと同時に、此問題が如何にかして解決せられ得ぬ限り、美學の基礎に就ての考察は尙徹底せるものと云はれぬことも自ら明らかであら

う。此重要なる問題を念頭に置きつゝ、ハイマンの現象學的記述を檢査する時、吾々は始めて彼の論文の正當なる價值を知ることが出来る。吾々が一方に於て、彼の記述に對し細部に就ては兎に角其全體に就ては殆んど全き賛同を與へ得るに拘はらず、他方に於て、尙何物が與へらるべくして、與へられぬ所のものに對する如き不滿を感ずる所以も亦此所に在る。而して又ハイマンに依りて與へられぬ所のものが何處に向つて求めらるべきかも、此所からして吾々には分かるのである。

## 十六

ハイマンが第二章に於て試みた美的形像の現象學的記述は今便宜のため數節に分けて、之を列擧すれば、次の諸項から成立つて居る。

(一) 美的形像に於ける構成要素。形像を構成する所の要素も、對象の其れと同じく、やはり直接的感覺的要素と間接的聯想的要素との二つに區別することが出来る。

但し形像に於ける直接的感覺要素は、已に對象の要素としての直接的感覺的要素と同じものでない。形像の構成要素としての間接的聯想要素に至りては、特に空間的物的經驗を内容とする聯想的觀念と、聯想せられ再現せられたる感情的感覺とが、對

象の場合に於けると異なるものとして注意せらるべきである。所謂「表現」若しくは表情は美的形像の本質を規定しない。(本論文七、本誌第十四號六八—八二頁参照)。(二)美的形像に於ける是等の構成要素の結合統一は、對象に於ける結合統一と同じくない(同上八本誌第十四號八三—八七頁)。

(三)言語形像の美的意味。そは所謂言語の具象性に基くのではない(同上九、本誌第十四號八七—九六頁及同上十本誌第十五號九九—一〇五頁)。

(四)美的形像構成の消極的諸條件。(1)職業的専門的見地からの隔離、(2)孤立に依れる隔離、(3)環境から際立たせることに依る隔離、(4)境界線に依れる隔離。(同上十一本誌第十五號一〇五—一一五頁)。

(五)美的形像の積極的條件。(I)依地的意味の排除、(イ)純粹感覺像、(ロ)假象性、(ハ)空間的時間的遠距離、(ニ)空間的時間的不確定、(ホ)異常。(II)異感覺内容其自らの意味の集中。(イ)通覽、(ロ)現象的統一。(III)強勢。(イ)直接的強勢因子、(ロ)間接的強勢因子。(同上、十二、本誌第十五號一一五—一一七頁、及同上、十三、本誌第十六號一〇二—一二三頁及び第十九號一〇四—一二〇頁)。

(六)言語形像に就ての再説。(同上十四本誌第二十號九三—一一一頁参照)。

吾々は是等の諸項の夫々に於て、フーマンの記述から學ぶべき多くのものを見出し得る。殊に直接所與としての感覺(知覺)内容を以て單なる直接的感覺要素と見るの誤に陥らず、多くの形式論者の犯し易き混同を避け得た點及び言語形像の美的意味を(ヘーゲル派のフリードリッヒ・ハイッシャーや又ハルトマン等の主張する如き)具象的觀念の喚起に在りと見ずして、言語そのものに基くものと見做したる點の如きは、假令彼以前に已に是等の諸點を正當に考察せし(學者(其一人として私は特にテオド・ア・マイヤーを挙げたい)があつたとは云へ、決して軽く見積らるべき成績ではあるまい。而して排除と集中と強勢との諸條件を詳述して、美的形像の構成を明らかにした點に於ては、所謂現象學的記述として略體裁の整へるものと云つても過賞ではあるまいと思はれる。

然しながら、フーマンの詳述せる諸條件(而して是等の條件は即ち美的形像の記述に於て根本的基礎概念たるものである)は、其消極的なるものは云ふ迄もなく、其積極的條件なるものも、畢竟如何にして直接所與たる感覺内容が、其自らとして吾々の注意を引き附け得るか、の條件に過ぎない。是等の條件の下に於て感覺内容が依他的意味から游離し、其自らとして注意せられるのである。併し吾々の注意を最も強く

引く所のもの、吾々が他に注意を放散するとなしに之れにのみ集中する所のもの、若しくは吾々が最も自然に之れを捕捉し得る所のものは、果して同時に吾々に取りて最も價值あるものと云へるであらうか。ハーマンが其自らの意味を有すと云ふ所の感覺内容は、實は其自ら意味を有すると云ふべきではなくして、單に依他的意味の排除と隔離とに依り、而して依他的意味に依りての強勢の補助を得て、僅かに其自らに向つて吾々の注意を暫らく引き附けるに止まるものと云ふべきではないか。集中の條件たる『通覽』及び『現象的統一』に就て考ふるならば、吾々の此疑は決して根柢なきものでないことが明らかであらうと思はれる。此所に吾々の不滿が存するとは、前述の如くである。而してハーマンが所謂『表現』と表情とを美的意味の規定として否定する議論(本誌第十四號七九—八一頁)美的形像に於て形式と内容とが分離せられてはならぬと云ふ議論(同上八七頁)及び感情移入説に對する彼の批難(本誌第十二號一〇五—一〇六頁)の中に、一面首肯しなければならぬ點の有すると共に、一面此等の正當なる議論の歸結として、如上の缺陷が現れて來る事を思へば、依他的意味に基づく表現の否定が必しも總ての意味に於ける表現を否定し得ぬ事、又形式と内容との融合を云ふ事が必しも内容を全然否定する事であり得ぬ事が明らかとなる。蓋し

吾々の見る所に依れば、ハイマンが『表現』と『表情』とを美的意味の規定として否定するのは正當である。又形式と融合せざる内容を美的形像から排除し、美的形像に於ては此二者が區別せられぬと云ふのも正當である。然しながら、此意味に於ける表現と内容との否定は、美的形像が其自ら意味を有するものなること、即ち依他的意味に基ける表現と内容とを許さぬものなること、を斷定し得るに止まつて、美的形像其自らの意味が形式のみに在ることを論斷する論據とはなり得ない。然るにハイマンが感覺内容其自ら意味を有するもの、即ち形式と内容との融合を示すもの、として美的形像の構成を記述する所に就て見れば、其構成條件なるものは盡く皆吾々の注意を集中する條件吾々の捕捉作用の條件統覺の條件たるに止まる。従つて、其等は畢竟美的形像の形式的原理と見做さるべきものに外ならないのである。之に到つてハイマンが美的形像と做し形式と内容との融合と見做し、其處には何等の表現も表情も無いと云つて居る所のもは、畢竟何等の内容なき、従つて何等の意味なき形式に等しきものと成り終るのである。換言すればハイマンに依れば、一方に於ては、依他的意味に基く總ての表現と内容との排除は、美的形像か其自ら意味を有するものなること、而して其自ら意味を有するものなるが故に形式と内容との融合である

ことを明らかにし得る。併し他方に於ては、美的形像に於ける形式に融合する所の内容は、依他的意味に基く内容の暫らく無害となつたものに過ぎず而して美的形像其自らの意味とは、總ての依他的意味から暫らく游離すると云ふことにのみ基くものに過ぎぬのであるからして、此の如き美的形像は、其自らは何等の意味なきもの、何等の内容なきものと云はなければならぬのである。之に至つて、吾々が先きに注意した所の問題、即ち美的形像其自らの意味とは果して何の故に一つの意味となり得るのであるかの間が、ハイマンの現象學的記述に依りては、解決せられないと云ふことが愈明瞭ことなるであらう。

ハイマンの現象學的記述の價値は、吾々が極めて高く見積らんと欲する所である。美的意味が感覺(知覺)内容其自らの意味に基くものなること、併し聯想的要素が之れから排除せらるゝを要せぬこと、従つて美的形像は形式と内容との融合であることを明らかにし、其構成要素と構成條件とを記述して、總ての他の意味との區別を確立した點に於て、所謂現象學的記述の任務は完全に成し遂げられたと云つて差支はない。然しながら總ての依他的意味から明瞭に區別せられ得た其自らの意味なるものが何に基いて其意味を有するのであるか。此問題は、感覺内容其自らの構成條件

を明らかにして、それが自ら吾々の統覺の條件に協ふことを指摘するだけでは、解決せられない。假令之れに加ふるに、依他的意味の排除と、又依他的意味の無害となりたるものに依りての強勢とを以てしても、尙此問題は解決せらるべくもない。直接所與が直接所與なるが故に其自ら深き意味を有する所以、感覺内容其自らの意味が、其自らとして吾々に價值ある所以、美的形像が美的形像なるが故に吾々に取つて意義ある所以——是等を明らかにして、始めて此問題は解決せられべきである。ハルマンがリツプスの感情移入説に對して示して居る無理解は、やがて彼れの現象學的考察が其れ丈けでは足りぬことを吾々に教へる居ると共に、又偶何處に吾々の求めて居る所のものが見出さるべきかをも吾々に教へて居ると云へるであらう。(完結)